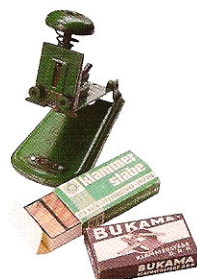
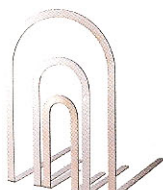
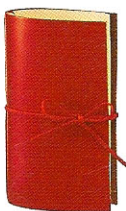
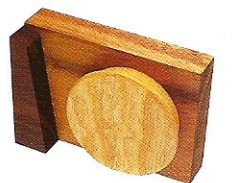
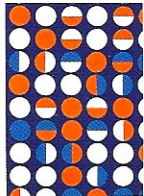
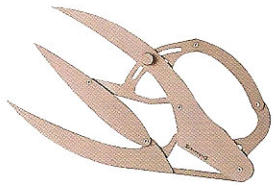


7/15
2006 No.179
500
yen

pen

with New Attitude

使うほどに楽しくなる！
スタイルのある
文房具を選ぶ。
日常を心地よく過ごすために、
男のヒーリング・アロマ



美しいモノを見ると測ってみたいくなる、サイズの美学を極めたデザイナー



デルフトにある、住まいと職場が一緒になった建物が彼の拠点。「集中したい時は、書斎でひとりで静かに仕事をする」という。

「年齢のせいかな、コンピュータはもうもろ手で」と苦笑するのは、プロダクト・デザイナーのブルーノ・ニナベル・ファン・エイベン。この国の硬貨、名作と称される腕時計、知的な使い心地の文房具などで知られるデザイナーだ。彼は、いまでも昔ながらに鉛筆と紙でデザインをしているという。フォルムのバリエーションを試す時には、紙を丸めて製図に貼り付けてみたり。一スタッフは「バイテク」を駆使して仕事をしてくれるけどね（笑）。だがブルーノの作業はすべてアナログだ。

プロダクトの周辺には、さまざまなサイズがある。

彼のデザインは、究極の機能性や、知的かつ人間的なタッチもさることながら、プロダクトが放つエレガンスに定評がある。「たとえば」と、ポケットから取り出したのは、「貼り付け」作業には欠かせない接着テープカッター。人材派遣会社の広告ノベルティグッズとしてデザインした自作で、机の上に置くとコマのように軽く傾いた。「プロダクトを魅力的にする要因のひとつはアイデアだ。このテープカッターで言えば、コマのようなフォルムでも、モノをエレガントにしているのは、そのサイズなんだ」と語りながら、靴の中から小さなメタルの定規を取り出した。カッターの各部を測りながら、全体の大きさだけでなく、素材の厚みやパーツの間隔など微妙な違いが全体の印象を変えてしまう」と説明する。人間工学的に理想的な大きさや重量、接着テープなどの市販のモノの規定サイズ、そして見た目に美しく感じる微妙なラインの長さや角度など、プロダクトの周辺には数々の「サイズ」が存在する。彼は、それらを注意深く緻密に分析しながら、優雅で知的なプロダクトを創造する。

「だから、美しいモノを見ると、つい測ってみたくなるんだ」と、澄く光るメタル定規を指で撫でながら笑う。「そういえば、これもまたいいサイズでしょう」と差し出したその15cmのメタル定規は、彼がデザインの勉強を始めた18歳の時に購入したもの。いつもカバンに入れて持ち歩き、さまざまな「美」を測ってきた。彼の創作を陰で支えてきた大切な品だ。

彼が毎年使っている、細長のポケット手帳も機能的なサイズが気に入っているという。あと1cm幅が広がった持ちにくいし、逆に細ければ書き込むスペースが減ってしまう。「プロダクトとはフィジカルなもの」と語るブルーノにとって、手に馴染む「サイズの美学」とは、エレガンスを具現化する論理なのだ。

Bruno Naber van Eyben

●1950年、小クスデル生まれ。マーストリヒト芸術アカデミー卒業後に独立。腕時計、ジョーリーは多数のプロダクトを手がけた。85年、世界屈指のプロダクト・デザインオフィス「npk」を他の2人と創設したが、97年に独立。



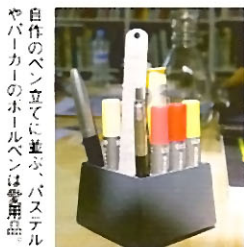
ペーパートレイはエンソ・マリ作。同業者として高く評価している。



手前はデジカメ、右は鉛筆。左はクリップを入れた。自作。



定規はイギリス製。手帳はオランダのインターメディア社製だ。



自作のペン立てに並ぶ、バスターやバーカーのボールペンは愛用品。